

そこまで言われて思い出す。いつだったか、セルティと新羅の家で行われたホームパーティーだか鍋大会だが、にいた高校生だ。高校生なんだとセルティが言っていたが、中学生にしか見えねえな、と思ったことまで思い出した。早い話、目の前の少年はかなりの童顔だった。

「ああ、えつと確か、竜……？」

「竜ヶ峰です。竜ヶ峰帝人と言います。あの、突然で本当にずうずうしいですけどお願いがあるんです」

友人の友人、という立場でしかない静雄を捕まえて、必死の形相で『お願いがある』と告げる帝人はとにかく切実そうだった。しかも童顔なのでなんというか、いたいけな雰囲気もある。よほどのことなのだろう。

「何だ？」

用件によつては速攻で断るが、話を聞かないほど無情でもない。

すると真剣な眼差しを向けて、帝人が問う。

「静雄さん、モヤシ買いませんよね？」

「あ？ ああ。買わねえが」

真顔でいったい何を聞くんだったこいつ、と思いつつ、買わないのは事実なので頷く。

「あの、だったら十円モヤシを購入して、僕にゆずつてもらえませんか。お金はもちろん払いますから！」

「……あ？」

相変わらず帝人の表情は真剣そのものだ。

（つてことは、だ）

帝人はタイムセールの一袋十円（一人二袋まで）のモヤシが欲しい。そして静雄はモヤシが必要ない。それはわかった。

「なら自分で買えばいいんじゃないか？」

一人二袋買えるのだから、帝人も二袋買えるはずだ。四袋欲しい、というのなら、残り二袋は通常値段のモヤシを買えば良いだろうに。モヤシは安い、ということくらい、静雄だって知っている。そして目の前の少年も知っているだろう。

そう思いつつ帝人の手元を見てみれば、すでにレジ袋をぶら下げている。どうやらすでに購入済みらしい。

「……その通りですよ。すみません、突然ずうずうしく変なことを言つて。ご迷惑をおかけしました」

ぺこり。深々と頭を下げる少年はひどく礼儀正しい。静雄の言葉に頷いているが、おそろくとても消沈している、ような気がする。なんだか放っておけない気分になった。

「モヤシ二袋だけで良いのか？」

「え？」

下げていた頭を上げ、きよとんとした顔で帝人は静雄を見上げる。なんというか、小動物的な少年だった。

「確か卵も安いって言ってたぞ。そっちは良いのか？」

「あの、いいんですか？」

「構わねえ。別に損するわけでもねえしな」

言うとは、まあ、と少年の顔が途端に輝く。そうして浮かべるのは、満面の笑みだ。